

自然表出と不一致表出による感情の読み取りに違いは見られるのか

○門田 翔太¹・橋本 優花里²

(¹ 福山大学大学院人間科学研究科・² 長崎県立大学)

我々の感情表出のパターンは、感情通り表出する自然表出と感情とは異なる表出をする不一致表出の2つに大別できる。それらの表出の読み取りの違いを研究したものに、野口・吉川(2010)がある。彼らは、参加者に感情喚起映像を提示し、その映像を見て感じた感情について自然表出と不一致表出を求めた。そして、撮影した表情を他の参加者に見せ、各表情が自然表出か否かを評定させた。その結果、男性は不一致表出であると見抜かれ、女性では不一致表出であっても自然表出であると判断されるという性差が示された。

ところで、自己表情と他者表情では読み取りに差があるのだろうか。鈴木(1991)は、自然表出では自己表情と他者表情の読み取り能力には差がないことを示している。このように、自己表情認知の研究では、自然表出については明らかにされているが、不一致表出については検討されていない。そこで本研究は、自己と他者での感情調整の違いが感情評定に及ぼす影響について検討した。

方法

参加者 大学生32名(平均年齢=20.4歳, $SD=1.0$)。

映像刺激 予備実験を行い、喜びまたは悲しみを喚起できた映像をそれぞれ1種類ずつ使用した。

実験材料 ウェブカメラ(Logicool), パーソナルコンピュータ(NEC), ディスプレイ(Tobii Technology Japan)。

手続き 実験は個別に3回に分けて行われた。1回目では、喜び映像と悲しみ映像について、それらを見た時に感じた感情の表出(自然表出)と、感じた感情とは反対の感情を表出(不一致表出)させ、撮影した。さらに、各映像視聴時に6感情それぞれについてどの程度感じたのかを7段階評定させた。2回目では、1回目で撮影した自己表情について、表出者が6感情をどの程度感じているのかを7段階評定させ、3回目では、使用許可を得た他者表情を提示し、自己表情と同様の評価をさせた。表情の提示順序についてはカウンターバランスをとった。

結果

感情喚起の確認 各映像刺激において意図した感情が喚起されていたかを調べるために、自然表

出下での各感情の評定値を映像間で比較した。これについて、対応のあるt検定を行った結果、喜び、嫌悪、恐怖、驚きは、悲しみ映像より喜び映像で喚起されていた($ps<.05$)。一方、悲しみは、喜び映像より悲しみ映像で喚起されていた($p<.01$)。怒りについては差が見られなかった($p>.05$)。

他者表情 喜び表出映像について、感情別に、感情調整(自然, 不一致)×表出者の性(男性, 女性)の2要因の分散分析を行った結果、全ての感情において有意な違いは見られなかった($ps>.05$)。また、悲しみ表出映像においても、全ての感情において有意な違いは見られなかった($ps>.05$)。

自己表情 喜び表出映像について、他者表情と同様に2要因の分散分析を行った結果、全ての感情において有意な違いは見られなかった($ps>.05$)。また、悲しみ表出映像においても、全ての感情において有意な違いは見られなかった($ps>.05$)。

考察

本研究では、自己と他者での感情調整の違いが感情評定に及ぼす影響について検討した。その結果、自己と他者の表情共に、感情調整の違いに関わらず、感情評定に違いは示されなかった。

まず、他者表情については、野口・吉川(2010)では、表情表出の強度が同程度のものを選定した4名のみで実施していたが、本研究では、表情表出の強度を統制しておらず、表出者も32名であった。したがって、本研究では刺激表情の表出強度の違いが感情評定に影響した可能性が考えられる。

次に、自己表情について、井沢(1959)が、自分の顔に不満を持つ人が6割以上いると述べている。つまり、本研究においては、評定者が自己顔に対して表出した感情とは別の印象を持つことで、感情評定に影響した可能性が考えられる。

今後は、表情の表出強度の違いや自己顔に対する印象評価を踏まえて検討する必要がある。

引用文献

野口 素子・吉川 左紀子(2010). 表情表出による情動調整が受け手の情動と対人印象判断に及ぼす影響—不一致表出に着目して— 対人社会心理学研究, 10, 147-154.